

オリーブの木

No. 49
2013年8月



「平和の架け橋プロジェクト in 東北2013」岩手県大槌町へ向けて出発の朝。JR東京駅で。

支援者の皆様、

8月5日、イスラエル・パレスチナ・日本の若者たちが東京駅に集まりました。「平和の架け橋 in 東北2013」のスタートです。笑顔溢れる青年たちが、心と力を合わせて参加するプロジェクト、被災地の皆さんのどんなお役に立つことができるでしょうか。このささやかな奉仕活動を通じて、参加者全員が平和の尊さを実感できるよう、お祈りください。

さて、聖地では3年ぶりにイスラエルとパレスチナの直接交渉が再開しました。本当の和解までは紆余曲折があり、まだまだ時間がかかるとは思います。希望を失わずに交渉の行方を見守りたいと思います。

子どもたちの未来のために平和が必要です。皆様のご支援を心から感謝いたします。

井上 弘子 スタッフ一同



NPO法人 **聖地のこどもを支える会**

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-7-502

TEL & FAX **03-6908-6571**

E-mail : seichi@k.email.ne.jp hiroko@michi-no-kai.com

ホームページ : <http://seichi-no-kodomo.org>

郵便振替 : 00180-4-88173 加入者名 : NPO法人 聖地のこどもを支える会



Accountability
Self-Check 2008

当NPOは、国際協力NGOセンター(JANIC)によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野(組織運営・事業実施・会計・情報公開)について適正に運営されていると認定されました。

事前研修会のまとめと感想

8月のプロジェクトに先立つ6月22日～23日、JICA東京国際センターにて事前研修会が開かれました。プロジェクトに参加する若者とスタッフ計13人が参加、実り多い2日間を過ごしました。

事前研修会のあらまし

● 6月22日(土)

午前 自己紹介・アイスブレイキング・他己紹介
午後 震災資料 被害の数値や大槌町の詳細(概) 現在人口12000人/ 死者800人/ 行方不明者200人
震災ドキュメンタリー番組視聴
数メートルの差で避難した建物が変わり 生死を分けた同僚の話など。
カリタスジャパン古木神父様による講演
この人はどういう立場で被災されたのかに注意すること。
自分が満足したか、相手に何かを残せたかではなく、自分がどのような心で活動に携わったか。
ボランティア活動は目的でなく通過点、その後の人生でハートが手足を動かす癖をつける、気づきの世界を広げる。
愛するだけでなく愛されること、それが一つのバロメーターになる。
村八分などが起こりやすい現地の膠着したコミュニティに分け入ることがボランティアの一つの仕事。

夜 一日のシェアリング
外の人にコミュニティの汚いところは見せないと思う。でも外の人にしかできないこともある。
第三者の当事者性。
何ができるかという議論があるが、できることとできないことはやってみないとわからない。
第三者は自分たちの視点を伝えることが必要。イスラエル・パレスチナの一人一人と分け隔てなく友達になることが一番。

● 6月23日(日)

午前 宿題発表
エルサレムの歴史 エルサレムを取り巻く宗教 分離の壁とチェックポイント 入植地 パレスチナ難民 領土をめぐる動き(イ

スラエル建国前～中東戦争あたり) 国連での動き(国連決議、パレスチナのUNESCO加盟) インティファダ(オスロ合意関連) Neve Shalom(両国の相互理解への取り組み)

午後 英会話
イスラエルパレスチナ関連DVD視聴
“Breaking the Silence”
“Soldiers are victims of this situation too.”
シェアリング
成長の証みたいな感じで兵役制を見ている。現状へのやるせない気持ちが、目に見えない相手への憎しみに変わっている。
日本人はさげすまれるけど、怒らない。→目先のことには反応するけど本当に大切なことは行動に移せない。
自分を生成する円グラフ(国、宗教、愛する人、地元への気持ち、昔住んでいた場所、なんでも)の中で、様々な項目があって、ある時一つの要素が一気に溢れ出てくる、それは時と場合で変わる。刷り込みは本当に怖い。これから兵役に行って、横にいる友達に銃を向けられるか。「それが命令ならば」。
軍とは「私」を殺して「公」の任務を果たすところ。

夜 大槌町交流会の出し物を決めて、練習
「花は咲く」合唱、南中ソーラン
追加練習を7月28日と決めて解散
(川野 由起)

参加者の感想

仲良くなることで

■井上 緑 (大学2年)

研修中、東日本大震災やイスラエル軍のパレスチナ侵攻のドキュメンタリービデオを見てディスカッションを行ったり、被災地で活動している方のお話を伺ったりするなど、貴重な体験となった。他の参加者とは全くの初対面であったが、徐々に打ち解け、話し合いをしているときに自分では思いつかないような意見

や経験(実際にパレスチナへ現地視察に行ったことなど)を聞くことができ、大変有意義な時間を過ごすことができた。

一番の疑問は、はたしてパレスチナの学生とイスラエルの学生は「仲良く」生活できるのだろうか、ということだった。というのも、パレスチナ人は町を不当に包囲され、家族や友達が死んでいくことも想定できるからであり、さらに徴兵を終えたイスラエル兵が「兵役に従事したことで、パレスチナ人を人として見るができなくなった」と言っていたからである。

今回、どんな体験をもつ学生が参加するか分からないが、反パレスチナ、反イスラエル感情が、お互いのコミュニティには根深く残っているのではないだろうか。

答えの一つとして、Neve Shalomという両者が共存する地域が存在したり、ハンド・イン・ハンドという幼少期から共に学ぶ学校などの活動があった。歩み寄ろうとする人がいるのを知って、両者が親しく過ごすことは不可能ではないのだと感じた。

ディスカッション中に出た意見のように「イスラエルの人もパレスチナの人も大半は平和を望んでいる」ということが正しいとすれば、こうした活動が広まって両者が和解できる希望もあるのではないだろうか。

お互いに嫌悪感を持つのは「相手の顔が見えない」という理由が大きい、と私は思っている。研修を通して、「相手の顔」だけでなくその人自身の中身まで知れるような関係に、誰もがなれるように努力しよう。

私自身が日本人学生として参加するにあたって彼らの間に入り、被災地で支援をしながら東北の方、参加者全員が仲良くなることで、少しでも平和を構築していくことに貢献したいという思いが強くなった研修であった。

印象に残った言葉

■谷口 太郎 (大学院生)

現在、大学院で平和を理論的に考えている私には、学部生たちの率直な意見が新鮮でした。この研修に参加し、本番でイスラエル・パレスチナの人たちに会う事が楽しみになりました。

2日目のプレゼンテーションを見ると、私も頑張らなければ追いつけない位の能力を皆がもっていることに気づき、良い刺激となりました。

心に残っているのは、古木神父様の講演です。ボラ

ンティア活動だけでなく、普段の生活でも考えさせられるのは、「人と接する時、自分の心のあり方はどうだったか?」という言葉です。

人と話をしてもうまく行かないと相手のせいにしてしまう自分でしたが、この言葉を聞いてから、心のあり方を一度見直すようにしています。

また、ボランティアに行くのが目的ではなく、その先の事が目的としてあった方が良く、という言葉も心に残っています。というのも、東北へボランティアに行った事があるというのがステータスのようになる風潮があると感じるからです。

時間があったらボランティアに行きたいけど、行けなくて悔しい、と聞くことがあるからです。もちろん、実際に行って得られる事は大きい。しかし、なぜ東北に関わるのか…と考えると、復興を願っているからでしょう。行けなくても、復興を助けることはできるのではないのでしょうか。「ボランティアに行く事が目的ではない」という言葉、心に残っています。

もう一つ、「何を話すかではなく、どうやって時間を一緒に過ごすのか」。イスラエル・パレスチナの子たちとどんな事を話せば良いのか……。そのような事ばかりを考えると、一緒に空間にいるという事実や空気感、雰囲気等が薄らいでしまうのではないのでしょうか。

人と接するときの自分のあり方を考えさせられました。参加されるすべての方々とのような時間を過ごすのか、いまから楽しみで仕方ありません。

「忘れてしまう」自分に挑戦

■川野 由起 (大学2年)

今年春のスタディーツアーに続き、8月のプロジェクトに参加しようと決意した最大の理由は、「忘れてしまう」自分に挑戦したいからだ。

スタディーツアーで目の当たりにしたイスラエル・パレスチナでの人々の生の姿、自分が受けた衝撃、その場を共有した者同士だからこそできるメンバーとの真剣な語り合いは、帰国後、大学生活でも、常に心の隅に残っていた。今でも、自分のひとつの経験として消化しきれないはまだ。時間がたち、考え直す機会をおざなりにしたまま「いい体験をしたなあ」と振り返ることしかできないのは絶対に後悔すると思った。

大学での授業で「この写真にはあるタイトルがついています。あててください」と、ブルドーザーと夕日、海の写った写真を見せられた。「復興」という言葉が誰

日本の支援者の 皆さま、ありがとう!

おかげさまで、この1年間、延べ248名の生徒が学校へ通うことができました。現地で管理いただいている連帯事務局長から、ていねいなお礼の言葉と合わせて、各学校から領収書をいただきました。

からも出てこず、「一年前の授業では正解が出ました。君たちは、忘れる人間なんですよ」と教授が言ったことにショックを受けた。悔しいとも悲しいとも何とも言えない気持ちになった。

古木神父様がおっしゃっていた「ガラスを磨いたことのある人は、ガラスの汚れに気づいて綺麗にしようとする。磨いたことのない人間は、汚れに気づかないか、汚れていても放っておく」という言葉に、強く感銘を受けた。「気づきの世界が広がると、自分のハートと手足を動かすことがつながるようになる」ともおっしゃっていた。

プロジェクトでは、日々の生活に追われて忘れていく大切なことでも、何かのきっかけでそれに気づくこと、そして気づいたらすぐ実行に移すこと、そのような態度を身につけたいと考える。

個人レベルで知り合いになれば

■松本 美樹 (大学1年)

研修ではたくさんのお話を吸収できた。中でも「face to face」という言葉に感銘を受けた。「面と向かって」という意味で、被災された方々やイスラエル、パレスチナの人々、どちらにも当てはまると思う。

●東日本大震災について

私は東日本大震災についてほとんど何も知らなかった。研修で古木さんの話をきいて、被災地は本当に悲惨な状態であったということがわかった。

東北で、私は相手にしっかり善意をしめそうと思う。「ボランティアする前の自己満足」ではなく、「結果としての自己満足」は大変良いのではないか。一生懸命相手のために何かをし、相手が喜んでくれたら、それは一番の報酬であり、満足すべきものなのだ。

●イスラエル、パレスチナについて

皆のわかりやすいプレゼンテーション、イスラエルに行った人の話、映像をみて理解が深まった。

イスラエルの兵士は兵士で苦しんでいることに、相当なショックを受けた。イスラエル兵も、とは思ってもよらなかった。

平和への道筋は大変長いけれど、個人レベルで互いが知り合いになれば、それは絶対に平和への一歩になると思う。たくさんの人々の一歩が平和をつくりあげるだろう。8月のプロジェクトで、それを十分に噛みしめたい。



所在地・学校名	支援できた 生徒数
●エルサレム	
「約束の地」スクール	2
アル・フォルサン学校	2
エルサレム学院	1
サレジアンシスターズ・スクール	1
シラ特殊教育スクール	14
聖アントニオコプト・カレッジ	2
聖タルクマンズ・スクール	14
聖ディミアナ・スクール	5
聖ヨゼフ学院	33
ダル・エル・ティフル・スクール	3
柱の聖母学院	9
ブリッジ・インターナショナルスクール	2
ライフゲート・リハビリセンター	4
ルネッサンス学校	2
●エルサレム、 Beit・ハニーナ	
ラ・サール学院	24
●エルサレム、ラマラ	
聖ジョージ学院	10
●Beit・ジャラ	
希望中学校	8
タリタ・クミ・スクール	10
●ベタニア	
オーソドックス・スクール	17
●ベツレヘム	
エルサレム・スクール	2
ダル・エル・カリマ・スクール	12
善き牧者スクール	8
ロザリオ修道会スクール	20
●ヘブロン、ラマラ	
アラブ福音学校	17
里子(延べ)	26
合計	248

日本の“若者”を通して見る イスラエルの“若者”像

「イスラエル人の特徴は?」と聞かれたら、私は「旅好き」だと答えると思う。ここに来てから知り合ったイスラエル人の中に、“海外への一人旅未経験者”は今のところ一人もいない。みんな一様に、数ヶ月単位でのバックパッカー経験者ばかりで、面白いことに、決まって行き先はアジアか中南米である。

ご存知の方も多いだろうが、イスラエルには満18歳になると(高校を卒業すると)、男子3年・女子2年の兵役がある。それが終わると、「解放」されたかのように、みんな旅に出る。そのあと(行きたい人は)大学に入ることになるので、私より年上でもまだ大学生をやっている人がたくさんいる。もちろん、旅に出ない人もいるし、1年くらい働いてから大学に入る人もいる。兵役中に「優秀」だと認められ、大学に行く人もいるらしい。だからこの国では、“18歳と25歳が一緒の学年で授業を受けている”、なんてことも珍しくはないのだ。

先日久しぶりに会った友人は、「会社に交渉して半年間の“無給休暇”を取得したから、来月から旅に出るの」と意気揚々と語ってくれた。私はここの人たちの、“枠にとらわれない”自由な生き方がとても好きだ。「年齢?」「性



友人の双子を抱いて。

別?」「周りが…」という言い訳も、彼らにとっては“So WHAT?!”ということらしい。

それから、この“国民皆兵”制度。思うところは色々あるけれど、テルアビブで知り合ったイタリア人の女の子(21歳)の感想が「確かに!」と共感したのでご紹介させていただく。

彼女は2週間のテルアビブ旅行中、兵役中のイスラエル人の男の子(21歳)と知り合って恋に落ちた。その理由が、「同年代のイタリア人の男の子と比べて、イスラエル人の男の子は“mature”(大人っぽい)だから」とのこと。高校を出るといわゆる「軍隊」での生活を強いられる彼らは、考え方が大人で、物事をよく考えているように見えるらしい。この印象は、私にも思い当たることが何度かあって、「皮肉なことに」イスラエル人の魅力の一つになっているのかも…とったりする。

支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- * 毎回 郵便局へ払込みに行く手間が省けます。
- * いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます!

お申込み・お問合せは
当法人事務局 **03-6908-6571**
または **042-636-9218** (中山)

顔の見える支援 里親募集中!

ある特定の子どもの教育を、毎月一定の支援金で継続的にサポートする里親制度。一歩進んだ国際協力のかたちです。

里親と里子の間で、写真や手紙の交換をすれば(任意)、個人的なつながりが持て、子どもの成長を身近に見守ることができます。

詳しくは、当法人事務局まで。

2013年度 総会のご報告



当NPO法人の総会が、去る6月16日、サンパウロ宣教センター(東京・四谷)にて開催されました。2012年度事業報告及び収支決算、2013年度の事業計画と予算案が全会一致で承認され、滞りなく終了したことをご報告いたします。また全役員の任期満了にあたり、改選が行われ、理事は8名が再任、1名が新しく選任され、就任いたしました(2名退任)。監事2名は再任されました。

2012年度 収支決算報告

2012年4月1日から2013年3月31日まで

(単位:円)

科 目		金 額	各科目合計
I 収入の部	1 入会金・会費収入		
	入会金収入	260,000	260,000
	2 寄付金収入		
	聖地のこどもを支える会への支援金	7,009,632	
	青少年国際交流事業への支援金	2,121,840	
	資産受贈益	111,840	9,243,312
	3 青少年国際交流事業への助成金	1,171,114	1,171,114
	4 青少年国際交流事業へのイベント収入	782,698	782,698
	5 青少年国際交流事業への参加費収入		
	i 「'12平和の架け橋プロジェクト」	963,580	
ii 「'13平和を願う対話の旅」	3,492,480		
iii その他参加費収入	52,000	4,508,060	
6 雑収入	26,971	26,971	
当期収入合計 (A)			15,992,155
II 支出の部	1 事業費		
	(1)教育支援事業費	2,777,218	2,777,218
	(2)青少年国際交流事業費		
	i 「'12平和の架け橋プロジェクト」	5,119,358	
	ii 「'13平和を願う対話の旅」	4,068,310	
	iii その他プロジェクト	183,867	9,371,535
	(3)普及啓発事業費	1,376,064	1,376,064
	(4)情報収集事業費	60,000	60,000
	(5)報告会・講演会開催事業費	38,793	38,793
	事業費計		13,623,610
	2 管理費		
	交通費	77,340	
	通信費(含宅配費)	187,629	
	消耗品費	120,523	
	会議費	17,091	
	広報費	25,200	
	資料費	52,180	
郵便振替払込料金	123,400		
事務所経費	776,500		
給与(含交通費)	632,628		
その他	143,102		
管理費計		2,155,593	
当期支出合計 (B)			15,779,203
当期収支差額 (A)-(B)			212,952
前期よりの繰越収支差額 (C)			1,418,788
次期への繰越収支差額 (A)-(B)+(C)			1,631,740



ベツレヘムの元気な子どもたち。



エフェタのシスターとマイスちゃん。大きくなりました。

「平和の架け橋プロジェクト in 東北」から



プロジェクト支援のため7月に行われた“友好の夕べ”。
上原令子さんの歌声に感動のあと、パレスチナ料理で満腹。



スタディー・ツアーの学生たちのエフェタ訪問。
(日本の学生が共同で里親となり支援をしています)



イスラエル・パレスチナ・日本の若者たちが草取りをした
大槌町の墓地。お盆の時期だったので住民の方に喜ばれました。



仮設の集会所で、足湯とマッサージ。言葉は通じなくても、心は十分に通じました。



ボランティア活動のあとの分かち合い。
カリタス大槌ベースで。



大槌町の6～8歳児と楽しく遊びました。